

## 論文の要旨

論文題目 現代日本語における因果関係を表す接続語の意味・用法  
「だから」「したがって」「それゆえ(に)」「その結果」「その  
ため(に)」を中心に  
氏名 劉怡伶  
学位 博士(文学)  
授与年月日 平成16年3月25日

本稿は接続語「だから」「したがって」「それゆえ(に)」「その結果」「そのため(に)」を考察の対象とし、その意味・用法を記述することを目的とするものである。

先行研究では考察にあたって後続文の統語的特徴に注目している。後続文の統語的特徴を記述することは各語を区別するための有効な視点であることは言うまでもない。しかし、本稿ではそれ以外に更に次の二点に注目した。一つは、各語が異なる文体において異なる統語的特徴を持ち、異なる振る舞いをするかどうかという点であり、もう一つは、直前と直後にどのような表現が現れ得るかどうかという点である。特に、直前に逆接の接続語「しかし、でも」、直後に助詞「こそ」「か」が現れ得るかどうかは、各語の持つ意味的な特徴によって決まっていると思われる。従って、直前と直後に共起する表現を手がかりにしこれらの接続語の意味・用法の特徴を捉えることができると考えられる。

次に、本稿では、因果関係の知識が存在しなければ、前件と後件に因果関係があるといった判断を行うことは不可能であると考えため、先行研究のように主観 - 客観説の立場に立って、「だから」「したがって」「それゆえ(に)」「その結果」「そのため(に)」の意味・用法を記述しなかった。その代わりに、因果関係を表す接続語を用いる時に話し手の中に因果関係の知識が働いていると仮定し、この因果関係の知識の特徴の考察を通して各語の意味・用法の記述を行なった。本稿で用いた概念は下のようまとめることができる。

因果関係を表す接続語を用いる時に話し手の中に因果関係の知識が働いている。

因果関係の知識は知識「P → Q」のような形で表わされる。

因果関係を表す接続語の記述に役立つ因果関係の知識の特徴は次の三つである。(a)因果関係の知識は経験に基づき形成されるものである。(b)因果関係の知

識は論理学における  $p \rightarrow q$  と異なり，暗黙の前提が存在する。(c)因果関係の知識には知識「 $P \rightarrow Q$ 」，知識「 $P \rightarrow Q' / Q'' / Q''' \dots$ 」，知識「 $P' / P'' / P''' \dots \rightarrow Q$ 」の三つのタイプがある。

因果関係を表す接続語には前件と後件の関係を示す機能と，眼前の状況と発話行為の関係を示す機能がある。

因果関係の知識の成立に対する話し手の認識・認定の相違により異なる因果関係を表す接続語が用いられる。

因果関係を表す接続語における主観性の度合いが異なる。

本稿では前述した概念を用いて考察を行なった。以下は本稿の研究成果の一部である。

・「だから」の意味・用法：

「だから」を用いる時に話し手の中に働いている因果関係の知識は知識「 $P \rightarrow Q$ 」である。

「だから」の話し手は自分の中に働いている知識「 $P \rightarrow Q$ 」に基づき前件と後件の関係を表す場合と眼前の状況と発話行為の関係を表す場合がある。

話し手は自分の中に働いている知識「 $P \rightarrow Q$ 」が聞き手の中に成立していない（または成立しない）可能性があるとして仮定している。

「だから」は引用の形を取った時，または後続文の否定のスコープに入っている時に聞き手の中に成立する可能性のある知識「 $P \rightarrow Q$ 」を否定する用法になる。

・「したがって」の意味・用法：

「したがって」を用いる時に話し手の中に働いている因果関係の知識は知識「 $P \rightarrow Q$ 」である。

「したがって」の話し手は自分の中に働いている知識「 $P \rightarrow Q$ 」に基づき，前件と後件の関係を表す。

話し手は自分の中に働いている知識「 $P \rightarrow Q$ 」が聞き手の中にも成立している（または成立する）として仮定している。

・「それゆえ（に）」の意味・用法：

「それゆえ（に）」を用いる時に話し手の中に働いている因果関係の知識は知識「 $P \rightarrow Q$ 」である。

「それゆえ（に）」の話し手は自分の中に働いている知識「 $P \rightarrow Q$ 」に基

づき，前件と後件の関係を表す。

話し手は自分の中に働いている知識「P Q」が聞き手の中に成立していない（または成立しない）可能性があるかと仮定している。

・ 「その結果」の意味・用法：

「その結果」を用いる時に話し手の中に働いている因果関係の知識は知識「P Q' / Q" / Q"'...」である。

「その結果」の話し手は自分の中に働いている知識「P Q' / Q" / Q"'...」に基づき，前件と後件の関係を表す。

「その結果」は前件の示す条件から推論される可能性のある帰結のうち，話し手が現実世界を見て事実であると認識したものを示すものである。

・ 「そのため（に）」の意味・用法：

「そのため（に）」を用いる時に話し手の中に働いている因果関係の知識は知識「P' / P" / P"'... Q」である。

「そのため（に）」の話し手は自分の中に働いている知識「P' / P" / P"'... Q」に基づき，前件と後件の関係を表す。

「そのため（に）」は後件を引き起こすいくつかの可能性のある条件のうち話し手が現実世界を見て事実であると認識したものを示すために用いられるものである。

なお，本稿の考察結果に基づき各語における主観性の度合いを次のように考えることができる。

その結果 < そのため（に） < したがって < それゆえ（に），だから